

## ●凡例

入 = 入門概説書 / 研 = 研究書 / ル = 取材・ルポルタージュ / 文 = 文学 / C = コミック

児 = 児童書 / 他 = その他のジャンル

●生田武志・著、下平けいすけ・絵『おっちゃん、なんで外で寝なあかんの？』**児**

こども夜回りと「ホームレス」の人たち』あかね書房 2012年

「夜回り」の子どもたちが、野宿をしている人たちに声をかけ、おにぎりを手渡す。一人ひとりの人生が語られ、それが伝わる。あなたに「ハウス」は…、「ホーム」はあるかと問う。「野宿をしている人とのいい出会い」を求めて、子ども向けに書かれた本。「貧困とは？」の問いに、「飢えに苦しむ外国の…」と浮かぶ人も読んでほしい。(平)

〈参考〉DVD『「ホームレス」と出会う子どもたち』

ホームレス問題の授業づくり全国ネット制作 2009年

●有川浩『明日の子供たち』**文** 幻冬舎 2014年

「私たちを描いてください。」児童養護施設の少女の依頼で書き下ろされた作品。子どもにも選ばれた信頼に真摯に応え、終始子どもの視点を失わない。児童養護の現場を描く作品群のなか、関わるおとなへの批判や違和感を子どものまなざしから徹底して描く。支援とは、寄り添うとは？「与える人」となっていないかふり返らされる。(志)

●中脇初枝『きみはいい子』**文** ポプラ社 2012年

映画化された一作。「大人だからできる」「親だからできる」「教師だからできる」。その幻想から離れ、ひとりのしがいないひとりの人間が、地域で学校で、自らの非力さを出発点として、どこまで子どもに添えるか、ていねいに描いた作品。私にも何かできることがあるかもしれない。読み終えてそんな気持ちが湧いてくる。(志)

●天童荒太『歓喜の仔』**文** 幻冬舎 2012年

親の不在に耐えながら、子どもだけで生き抜くためにおとなの犯罪の末端を負うことになる子どもたち。フィクションに過ぎないと切り捨てられない力強さで迫ってくる。この子たちを食い物にするおとなが跋扈し、救いが届くことのないこの社会をなんとしても変えなくては。社会への憤りに火をつける。(志)

●柏木ハルコ『健康で文化的な最低限度の生活』**C** ビッグコミックス／小学館 2014年～

生活保護を受けることを自己責任と責め、生活保護申請を突っぱねることを冷酷と責める。では私たちは福祉の現場の「生活保護受給者」と「福祉事務所のワーカーの姿」をどれほど知っているだろうか。生活保護を受給しながら苦悩に閉ざした心の内で生き続けるためにもがく「私」を、待てるワーカーであってほしいと願う。(志)

●さいきまこ『神様の背中 貧困の中の子どもたち』**C** 秋田書店 2015年

非常勤として教室に復帰した主人公の前に、あえぐ子どもたちの姿が、次々に現れる…そして自らも。見ようとしなければ見えにくい「子どもの貧困」。その背景にある親たちの困難と孤立。就学援助、ドラッグ、DV、虐待、生活保護、奨学金、中三勉強会…たたみ込まれる苛酷なエピソードのリアル。綿密な取材の努力がうかがえる。(平)

●NPO法人豊島子どもWAKUWAKUネットワーク『子ども食堂をつくろう！人がつながる地域の居場所づくり』**入** 明石書店 2016年

今、全国にすどい勢いで広がっている子ども食堂。発端となった「要町あさやけ子ども食堂」を始めたNPOが、子ども食堂のつくり方、子ども食堂への思い、他の子ども食堂の声も多数紹介。子ども食堂は、貧困の連鎖を断つ装置として機能するのか。子ども食堂のもつ意味や可能性にさまざまな角度から迫る。(A)

●井戸まさえ『無戸籍の日本人』**入ル** 集英社 2016年

著者は自らの子が無戸籍となった経験から1000人以上の相談を受けてきた。映画「誰も知らない」は無戸籍で不登校、「ない存在」として生きた東京の4人の子の事件(1988年)がもとだったが、本書は今も社会が取りこぼしている子どもがそばにいることとその背景を、支援した家族のルポで明らかにしている。巻末に専門家連絡先一覧。(N)

●仁藤夢乃『女子高生の裏社会「関係性の貧困」に生きる少女たち』**ル** 光文社新書 2014年

国際的に、恥ずべき「人身売買」と見なされる「JKビジネス」。街を彷徨する少女たちのリアルを伝える著者は20代半ば。自らの中高校時代をふり返りつつ、女性を喰いものにする社会、その異常さを描き出す。「居場所」を設け、彼女たちを勇気づける取り組みを続けている。人と人との「関係性の貧困」にこそ目を向けよ、と。(平)

●小林美希『ルポ母子家庭』**ル** ちくま新書 2015年

子どもの貧困6人に1人、母子家庭の貧困は2組に1組。切っても切れない母子家庭と子どもの貧困。母子家庭はどのような生活を送っているのか。数十に及ぶリアルな母子家庭のようすを伝えたルポ。身を削る生活でも「子どもなど産まなければ良かった」と言わない彼女たち。真の少子化対策は彼女たちを支えることから始まる。(志)

●赤石千衣子『ひとり親家庭』**入** 岩波新書 2014年

子どもの貧困について知るうえで、ひとり親家庭の貧困問題の把握は欠かせない。平成25年版国民生活基礎調査では、子どもの貧困率16.3%に対し、ひとり親家庭の貧困率は50%を超える。非正規雇用による低賃金、重い教育費負担、男性稼ぎ主型社会、こうした社会の抱える歪みが、ひとり親家庭の生きづらさとして表面化している。(S)

●高橋亜美 早川悟司 大森信也『子どもの未来をあきらめない 施設で育った子どもの自立支援』明石書店 2015年 ル

児童養護施設を巣立った子どもの内面や葛藤を詩やエッセイに託したエピソード形式で紹介。現場の第一線で彼ら・彼女らに寄り添う支援者が、その背景やかかわりのヒントを具体的に説明する。子どもたちの問題を自己責任論ではなく、社会全体の問題としてとらえるために。「社会の子ども」という視点で、次の一冊もあわせて。(あ)

●石川結貴・高橋亜美『愛されなかった私たちが愛を知るまで』かもがわ出版 2013年 ル

●東海林智『貧困の現場』毎日新聞社 2013年 ル  
『15歳からの労働組合入門』毎日新聞社 2014年 入

08年秋のリーマンショックは、非正規雇用が広がるこの国の抱える問題を露わにした。仕事とともに住まいも失った労働者たち。年末の日比谷公園に、おびたしい数のテントが張られ、「年越し派遣村」が生まれた。著者は、派遣村に詰めた新聞記者。その後も、若者の「働き方」の困難、「働かせ方」の異常さをつぶさに描き続ける。(平)

●奨学金問題対策全国会議編『日本の奨学金はこれでいいのか!』あけび書房 2013年 入

この国は、高額な学費と「奨学金」と呼べない「ローン」を強いている。「お金がなくては学べない」のだ。多額の借金を抱えて社会に出る若者たち。2012年9月、国際人権規約の留保を撤回し、ようやく「漸進的無償化」への道を宣言した。教育機会が、貧困と格差の固定化や、さらなる拡大につながることであってはならない。(平)

●山野良一『子どもの最貧国・日本』光文社新書 2008年 入  
『子どもに貧困を押しつける国・日本』光文社新書 2014年 入

90年代、アメリカが子どもの貧困率を2.4%減らしたのに対し、日本では2.3%増えている。日米の児童相談所で児童福祉の現場を経験した著者は、このままでは日本は子どもの最貧国になると警鐘を鳴らす。見ようとしなければ見えてこない子どもの貧困の実態と課題、広がり始めた対策について理解するうえで、わかりやすい概説。(S)

●阿部彩『子どもの貧困 日本の不公平を考える』岩波新書 2008年 入  
『子どもの貧困II 解決策を考える』岩波新書 2014年 入

2008年著は、「子どもの貧困」という言葉を世に広めるきっかけとなった。「子どもの貧困問題があるのはわかった。では何をすればよいのか?」そう考える人の声に応え、2014年著では、子どもの貧困対策を具体化するうえでの政策・施策について、各国事例も交えて考察する。豊富なデータとともに、歯切れよい明快さが魅力。(S)

●青砥恭『ドキュメント高校中退いま、貧困がうまれる場所』ちくま新書 2009年 入

貧困や家庭での困難を抱えた子どもが底辺校に集まり、中退し、若年出産や不安定雇用等その後も困難な生活を余儀なくされている実態が、高校生1200人へのアンケート、中退をした若者たちの声、各種統計データからわかりやすく著されている。高校中退という事象を通して貧困が世代間で連鎖される要因について学ぶことができる。(S)

●中塚久美子『貧困のなかでおとなになる』かもがわ出版 2012年 ル

著者は朝日新聞の記者。上司の指示で母子世帯の取材を始めたが、取材を重ねるなかで見えてきたのは深く広がる子どもの貧困の現実だった。居場所づくりや学習支援など、問題解決への取り組みを紹介し、記事を契機に政策が変わることもあった。貧困のなかで生きる子どもたちの希望を探るしごとの成果のひとつである。(ゆ)

●子どもの貧困白書編集委員会編『子どもの貧困白書』明石書店 2009年 入 研

どのような子どもたちが「貧困」な状況におかれているか、すぐに想像できるだろうか? 105人にも及ぶ執筆者が、さまざまな立場・現場でとらえた実態について報告。この日本で、どれだけ多くの子どもたちがしんどい状況にあるかを多くの方に知ってほしい。定義や基本的なデータを収録。本書からキーワードも生まれている。(S)

●湯浅誠『反貧困「すべり台社会」からの脱出』岩波新書 2008年 入

「子どもの貧困」という言葉が連日報道されるようになった今、改めて読み返したい。子どもの貧困は、一部の子どもと親だけの問題なのか? 社会のセーフティネットが機能不全に陥った結果、年齢や性別を問わずどんな人でもすべり台から滑り降りるように貧困に陥る可能性がある。反貧困に向けた行動の必要性を訴える。(S)

●水島宏明『母さんが死んだしあわせ幻想の時代に』ひとなる書房 1990年 ル

バブル経済に浮かれた飽食の時代に、街の片隅で起きた餓死事件。3人の子どもを遺して亡くなった母親は、生活保護の受給を再三求めながら、窓口で断られていた。1987年1月、北海道札幌市北区で起きた出来事のルポルタージュ。今なお、同じような痛ましい事件が後を絶たない。2014年、生活保護をめぐる推移が加筆され復刊。(平)

●建石一郎『福祉が人を生かすとき』あけび書房 1989年 ル

80年代、東京・江戸川区福祉事務所のワーカーたちが、担当する家庭の子どもたちと、学習と交流の機会を始めた先駆的な「中三勉強会」の記録。ボランティアに実践され、当時学生ボランティアとして参加した若者たちが、活動を引き継ぐために江戸川区役所に入職し、継続への力となってきた。ここに“希望の連鎖”がある。(平)